



東京日々新聞

九百八十四号



芳幾
月報

吉原角町の妓樓鶴本のちのちの娘遊女解故の令中しよき其ころ買ひ
 別津の谷子と上槇町の若名安次郎と妻とあり夫婦と老母と共い意固ら
 安次郎は今年世三才と老母は七十歳あり家業ハ魚屋と病身あり上薄
 元手多し追々朝夕の烟りも立くぬるを妻がうらと熟談の上薩し中き
 餘儀を離縁ハ父許に在り免由安次郎と事と儀何處て活計と立てせ
 さま六年老る姑の飢渴も及んぬと歎き暮せども女の身まで之風も
 無けぬ愛をこゝろ夫の爲に身を賣る所多らんと昔風と思ひが
 古おけたまはるる嫁と谷子と殊に賣り方も手馴れしれ光月
 廿八日鶴本と相談整ひ二度の務と出稼の給金六拾圓と前
 借一その内十四圓を衣類手道具と求め残る五拾圓とい
 安次郎方へ送り是と家業の本錢して活計と立て老母と過せ
 玉と云遣じ自ら愛き川竹の流る身と沈めけと安次郎母子も深く事
 義と感涙と共し是と受取じ借時の方より一度責められて彼の辛
 田も忽ち残りおる多かり以前に替らぬ貧乏書其日中渡り兼る程多し折
 角らさうや言いで兵と深き情愛も功無く老母もろの難儀とさせる心極く
 かさす對し面目多け此世不在りて申すもは涙あやと沈まん涙あやと沈まん
 切の胸と堪へつ今度逢ひてその親切と謝し且ハ感別な愛を贈し此世の暇と言んと去ん九日の夕や
 安次郎の母と向つて吉原往てかこる逢ひ此間の禮と云て来たの思事事依ると夕晩ハ泊りて来る
 皆知ませんと云ハ置き速く小鶴本と手相成ならんと買ひ揚げ快く酒食頓て兩人とも打臥
 一たる其夜の曉のころと叫びる声はかこる驚ろき見と安次郎ハ咽喉突き俯伏するを
 ハ直と取り廻り誰を早くと声立ると家内中が騒真り速く手當色死よに至らぬ也



具足屋板

ホリエイ

